

金東仁「赤い山」と万宝山事件

——一九三〇年代の小説に現れた満洲——

鄭 惠 英

一 はじめに

金東仁の小説は、殺人や不倫などのような非日常的な題材が中心になっている。こうした問題点は、金東仁文学の歴史意識の欠如と芸術至上主義的な傾向としてすでに多くの論者によって批判的に指摘されてきた。¹⁾しかし、先行論の指摘のように、金東仁自身が社会現実²⁾に全く無関心であったかという点、必ずしもそうとはいえない側面がある。私達はそのような一例を「赤い山」に見ることができるところである。

「赤い山」は、「馬鈴薯」「ベタラギ」など他の代表的な短編に比べると、作品の構成力と文体の洗練度の側面において一段落ちている作品である。そのためであろうか、金東仁研究のなかでもあまり論じられておらず、当然、研究者たちにもほとんど注目されることはなかった。しかし、このような研究動向にも関わらず、「赤い山」は、韓国近代短編小説のさきがけと言われる金東仁文学を代表する作品として、韓国の中等国語教科書に収録されている。これは一体どのような理由からであろうか。中学校の国語教師用指導書によると、この作品の主題は「我が民族の心の中には民族固有の愛国心がある」ということになっている。作品鑑賞の項目では、「祖国愛と民族意識」の鼓吹に解釈の主眼点が置かれている。³⁾金東仁「赤い山」は一九七〇、八〇年代を経て、反日意識を示した代表的な作品として、「祖国愛」を鼓吹し得る教訓的な作品として評価され、中学校の教科書にまで収録されているのである。

しかし、はたして、中学校教科書におけるこのような評価は正当なものであろうか。この作品が執筆された一九三三年

の時代的な状況を考えると、中等教科書によるこのような評価にはさまざまな疑問が残る。以下、本稿では、金東仁「赤い山」が書かれた一九三〇年代の時代状況と他の同時代文学を分析することによって、この作品が持つ新たな一側面を考察する。

二 万宝山事件の文学的受容

日帝下の満州移民史は、一九三二年発生した万宝山事件の考察を通して、その大まかな輪郭をつかむことができる。万宝山事件は、「中国東北地方長春の北方万宝山で朝鮮人入植による中国農民との紛糾が日中両国警察の発砲事件となり、さらに朝鮮における大規模な排華暴動を惹起した事件」である。¹⁾ 日本、中国、朝鮮のそれぞれの利害が錯綜するなかで起こったこの事件を整理するため、まず、朝鮮人の満州移民史について見てみよう。

朝鮮人の満州移住が本格的に始まったのは、一八九五年頃からの威鏡道住民たちによる間島開拓からであると言われる。²⁾ もともと、国境地帯の住民や民族運動家などといった特定の人々による満州移住は、日韓合併をきっかけに全国的規模に拡大し、特に一九二五年からはその数が急激に増加する。朝鮮人の満州移住と日韓合併との連関性は、両者の間の密接な因果関係を充分予測させるものである。日韓合併と相俟ってその植民地政策の一環として一九一〇年東洋拓殖会社が設立され、日本政府の庇護下に多数の日本人移民が押し寄せてくる。朝鮮総督府の土地調査令と関連していた日本人移民たちによって、伝統的な朝鮮経済は崩壊の危機に陥ることになる。「豆油などで灯火をともしてゐたのが、いつしか石油を買ひ、草鞋がゴム靴に代り、機械で織つてゐた自家製の布木も、邑内で金を出して買」うなど、³⁾ 資本主義の急速な浸透と日本移民の進出によって朝鮮経済は没落し、その結果として朝鮮人農民は中国の東北地方に追われていくことになる。⁴⁾ このような民族移動の過程は、一九三二年発表された張赫宙の「追はれる人々」の中で細かく描写されている。

その翌春、昌洞イは家財道具を売り払つて、北間島へ行くと言つて、村を離れて行つたのだ。昌洞イの他に、二三戸あつた。彼等は亡者のやうに、衰へた体を引きずつて、村から姿を消した。去つた後には、家屋を毀してその跡を畑にした。その代りに、双岩洞の村の前方の丘の麓に、見慣れない農業の藁葺と違つて、麦藁葺の角ばつた家だつた。

「倭人が来ただ」

「昌洞イらの田き耕して居るだよ。」

村の人が話し合つた。

村を去つた者達の小作地は、それらの黒い着物を着た見慣れない農民達に依つて耕やされた。頬かむりをして、青い股引をはいて、着物のお尻をめぐつて、立ち働いた。・・・伏字・・・。昌洞イ等が村を追はれたやうに、彼等も自分達の故郷を××××（奪われた、筆者注）農民だつた。

新來の農民とは全然交渉がなかつた。その農民が殖える毎に白衣の農民が間島に流れた。

押し寄せてくる日本人移民と追われる朝鮮人農民という構図のなかで、万宝山事件は発生したのである。すでに言及したやうに、万宝山事件は一九三一年七月三日、中国東北地域の長春北方の万宝山で起こつたもので、朝鮮人入植者に対する現地中国農民の反発が日・中警察の発砲事件に拡大した事件である。一九三一年四月、朝鮮人農民約二〇〇人が中国人地主と十年の借地契約を結び、万宝山の荒地に入植して種蒔きに取りかかるが、水田経営のための伊通河につなぐ用水路開掘の問題をめぐつて中国農民と対立する。この問題の解決のため、日中共同調査委員会が設立され調査に取りかかるものの、なら具体的な解決策もなく終わってしまう。そして、同年七月一日から二日にかけて中国人農民数百人が実力行使に及び、用水路を破壊することで衝突になり、警戒していた中国側の警察隊と日本の領事館警察との発砲事件として拡大する。日本側では現地の軍の保護を要請するほどの緊迫した事件であつたが、事件自体は人命の被害なしで収まるもの、朝鮮では大規模な反中暴動が引き起こされることになる。

万宝山事件発生直後の七月三日、一〇〇〇人の示威群衆が集まつた仁川を皮切りに、水原、元山などを経て全国的に広がつたこの反中暴動は、七月六日、平壤においてその最高潮に達する。激怒した三千人の群衆が支那人收容所を襲撃し、これに対する警察の発砲にまでつながつたこの平壤暴動は、殺戮された支那人八二名、負傷者二二九名、それに発砲による朝鮮人死者八名という惨憺たる結果に至つたのである。暴動は以後、新義州や安東にまで拡大した後、七月一〇日を境にして鎮静化していく。しかし、この事件によつて、在滿朝鮮人に対する中国側の圧迫が一段と厳しくなつたのはいうまでもない。万宝山事件に対する客観的な検証なしで、ただの流言飛語によつて拡大した朝鮮の暴動は、在滿朝鮮人の立場

を悪化する結果となつたのである。⁸⁾

朝鮮・中国人農民間の些細な衝突に過ぎなかつたこの事件が大きく拡大したのは、日本と朝鮮における言論の刺激的な助長によるものだけでなく、朝鮮人移民に対する植民地の制度という、より本質的な問題から由来していたのである。その一端を、平壤事件勃発の一日前の一九三一年七月五日に大連から急いで平壤に到着した、日本プロ文学代表作家、中西伊之助の「満州に漂泊する朝鮮人」という一文から窺うことができる。中西伊之助は、在滿朝鮮人に対する中国側の迫害の原因として、在滿朝鮮人の帰化問題を指摘している。また、彼は、「万宝山事件と鮮農」(『中央公論』、一九三一・八)という一文の中でもこの問題を取り上げてゐる。十九世紀半ばから本格的に始まつた朝鮮人の満州移住は、日韓合併を起点にしてより大規模に行われることになり、これによつて中国当局からも警戒され始める。中国側の態度の変化と警戒は、すでに中西伊之助が指摘したように、朝鮮人の帰化が抱える、いわば二重国籍問題が原因である。つまり、「旧韓国の国籍法には「外国民ハ外国ニ移住シタル事ニ由リテ国籍ヲセズ」とあつてそれなりに日本帝国の法律」となつており、朝鮮人の場合は、満州での彼らの権益のため「たとひ中国に帰化しても、朝鮮の、日本国籍から離脱することができない」事情があつたからである。朝鮮人の二重国籍が中国側に警戒されたのは、「満州移住の鮮農が、全く中国に帰化してしまへば、土地の所有権も確認せられる」という中西伊之助の言及のように、二重国籍問題がそのまま土地所有権の問題、すなわち、領土問題と関係しているからである。つまり、中国側からみた場合には、満州の朝鮮農民はすべて日本国籍を持つ日本国民であり、そのため、「朝鮮人が二重国籍を持つのは侵略行動」としか受け取られなかつたであらう。⁹⁾

このような問題は、万宝山事件が発生した一九三一年、当時のもつとも窮迫な懸案であつた在滿朝鮮人の権益と保護のため、東亜日報が吉林省の省長代理とおこなつた会見の中でも確認できる。この会見で中国側は在滿朝鮮人の権益と保護を繰り返して約束はしているものの、その前提条件として在滿朝鮮人の中国国籍取得を強く要求している。満州へと勢力を拡張して行こうとする日本とそれを必死に阻もうとする中国側との激しい勢力争いのきつかけになつたのが在滿朝鮮人の問題であり、その争いが表面化したのが万宝山事件である。一九三一年一〇月に発表された伊藤永之介の「万宝山」で、作者が朝鮮農民と中国農民との衝突の背後勢力として中国政府を指摘したのも、このような理由からであらう。¹⁰⁾

夕方、近く万宝山の方角から一団の黒いかたまりが曠野を動いて来た。

段々それは支那農民の群であることが分つた。百名ばかりの人数で、だらだらと後から後から続いてゐた。

昨夜から、水路の開鑿によつて多少の被害のある上流方面の農民が、非常に激昂して襲撃して来るだらうと云ふ噂があつた。堰止の上流は雨季になれば、洪水に浸されるし、たださへ沿岸の田畑は水門の完成と同時に浸水するといふ、支那官憲の誇大な扇動的宣伝が大部効いてゐるらしかつた。事實は、僅か一天地ばかりの水田に浸水するだけだつたが……。

万宝山事件は朝鮮人の開墾地の放棄という形で一段落するが、このような問題こそ日韓合併とともに本格化してきた朝鮮人の満州移住の本質的な一面であつたといえる。それは、「故郷を追われ、国境をさ迷ひ出で、漣しない満州の広野をあてなく歩いて来た」在満朝鮮人達にとつてはその流浪が「また始まつた」ことを意味するものにほかならなかつたのである。¹⁶ その流浪の基底になつたのが、日本の満州進出への意志であり、その意志が現実化して現れたのが事件二ヶ月後に勃発した満州事変である。そして、本稿で扱う金東仁の「赤い山」もまさにこのような時代と背景の下で創作されたのである。以下、それを具体的に考察して見よう。

三 「赤い山」と満州

「赤い山」は、一九三三年四月、「三千里」に発表された作品である。¹⁷ 〈私〉によつて語られる「赤い山」の内容をまとめると次のようになる。

医者として風土病を調査するため満州を旅行していた〈私〉は、ある朝鮮人の集落を訪れ、そこで〈山猫〉というあだ名の人物に出会う。〈山猫〉は毎日を喧嘩と暴力で暮らす一種の「癌腫」のような存在として、村の朝鮮人社会からは大変恐れられていた。そんなある日、小作料のことで中国人の地主に呼ばれて行つた村人が殴り殺されて遺体になつて戻つてくるといふ事件が起こる。これに朝鮮人の村人は憤激するが、小作という立場上、どうしようもできない。そんな翌日、〈山猫〉が殆ど瀕死の状態で村に戻り、村人は初めて、彼が中国人地主に抗議しに行つたことが分かる。臨終を迎えた〈山猫〉は、最後に故郷の「赤い山」を見たいとつぶやく。〈私〉と村人は彼のために「愛国歌」を合唱し、〈山猫〉はそ

の歌を聞きながら臨終を迎える。

以上の内容から見ると、「赤い山」では〈私〉の視線によって、満州をさまよう朝鮮人浮浪者の〈山猫〉の話が語られている。そして、このような設定によって、在満朝鮮人の現実的な問題が浮き彫りとなる。しかし、作品全体から見ると、語り手である〈私〉の役割が非常に稀薄である。作品冒頭に紹介されている「満州の風習と風土病の観察のために、一年の予定で満州の旅に立った」ということが、〈私〉に関する記述のすべてである。しかも、それらの記述も〈山猫〉を語るために設定されたものにすぎない。しかし、このような〈私〉の存在の稀薄さは、「赤い山」を理解するにおいて、なによりも重要である。というのは、〈私〉という人物に対する考察は、一九〇五年から始まった満州移民史において、この作品が持つ時間的あるいは空間的な背景を窺わせるからである。

万宝山事件と平壤事件をきっかけに、朝鮮移民民に対する中国側の圧迫は、満州事変に到ってさらに強まっていく。とくに、事変勃発後、在満朝鮮人に対する敗残中国兵達の略奪、放火、殺戮は深刻なもので、各地域ごとには避難民同胞臨時救済会が設置され、また大連と奉天においては在満朝鮮人大会が開かれることになる。さらに、東京においても虐殺朝鮮人追悼会が開かれ、満州への関心は最高潮に達する。三一年一〇月、在満朝鮮人問題に関心を持っていた中西伊之助は大連を経て虐殺が深刻に行われた中国東北地方に入り、その虐殺の実態を調査して発表した「惨たり、在満朝鮮同胞」という一文は、この事件の惨状を生々しく伝えている。それによると、虐殺は「奉天を中心とする、鐵嶺、蕪順、漕原、開原等の諸地方」で行われ、その中でも大多数の中国兵士の脱走路であった蕪順が最も深刻であったという。中西のよって「城を洗う」という言葉で表現された虐殺劇はすべて朝鮮人を対象にしたものであり、ある村の場合は、一〇〇人以上の村人全員が殺された事例もあるという。このような中国人兵士による虐殺劇は、朝鮮と日本において甚大な怒りと多大な関心を呼び起こし、その結果、多くの知識人が事件の実態調査のため中国東北地方の視察を願う。中西もその中の一人だったのである。

このような時代的な背景から考察すると、「赤い山」の〈私〉の旅行の性格がどのようなものであったかが多少類推できると思われる。満州事変勃発以降、満州内の朝鮮人集団居住地への旅行は、中西の話によると「軍人か警察官のやうに数十名が武装して行かねば危険至極」であったという。このような生命の危険を伴う旅行が行われる時期に遊覧の雰囲気さえを匂わせる風習研究のための満州旅行というのは、現実的にほとんど不可能なことであったと思われる。とすると、

風習研究のため満州を旅するという〈私〉の旅行は、一体どのように解釈できるであろう。それに対する有効な答えの一つが、すでに見てきたように、中西のような人々たちによって行われた虐殺事件の実態調査旅行である。換言すれば、「赤い山」の〈私〉の旅行は、朝鮮人虐殺事件が政治的な問題になり、対内外的に活発に進行した事件の実態調査の動きと連動していたということである。しかし、「赤い山」を通じて金東仁が認識した一九三〇年代の満州は、中西伊之助らによって認識された満州とは全く異質な空間であったといえる。それをよく示しているのが、作品の葛藤の中心人物である〈山猫〉、すなわち、村の癌腫として扱われている鄭益鏞の履歴である。

益鏞といふ人物の故郷が何処であるかは、××村で誰も知つてゐるものはなかつた。訛りからすれば、京畿訛りらしくも思へるが、早口でまくしたてる時は嶺南訛かと思はれる節もあり、喧嘩でもやつてゐる時は西北訛りが出る時もあった。それだから、訛りで彼の故郷を推定することは出来なかつた。易しい内地の言葉も知つて居り、漢字にも心得があり、支那の言葉は素より相当なものだし、それにロシヤの言葉も出来ることなどで、方々を数多く渡り歩いたといふことは、大体見当がつくのであるが、彼の経歴を仔細に知つてゐる者はなかつた。²⁰

描写された〈山猫〉の履歴は、総じていえば、〈流浪〉という一言に圧縮される。「漂泊する朝鮮人」という中西伊之助の表現の中からも窺えるように、植民地の朝鮮人を描写するにおいては、〈流浪〉のイメージは殆ど必須的なものであった。事情と状況において、その生き方の表面的な形式の違いはあるものの、〈山猫〉や村人の朝鮮人たちを初め、医者である〈私〉に至るまでの、「赤い山」のすべての朝鮮人が〈流浪〉という共通点をもっている。しかし、ここで一つの疑問になるのは、医者である〈私〉と村人の流浪は、歴史的な意味合いの中で考えられるが、満州をさまよう不良者である〈山猫〉の生き方も同様の意味合いで考えられるのかという問題である。つまり、〈流浪〉という点において共通しているものの、「賭博打ち喧嘩因縁付け、刃物三昧など」に明け暮れ、「婦女子に飛びかかることは、朝飯前のこと」で、朝鮮人の村人から、「癌腫」としか思われぬ〈山猫〉の〈流浪〉を、正直で誠実な部落民の〈流浪〉と同様に把握するのはいくつの問題があるように思われる。しかも、この作品から見ると、この両者が加害者と被害者という相反する立場に置かれている時には、なおさらそうである。

このような歴史的な意味合いから「赤い山」を考察した場合、「山猫」だけではなく、村人からも万宝山事件と満州事変以降の朝鮮移住民の現実的な状況を窺うことは難しい。「山猫」はいたずらに村人に暴力を振るい、村人はただそれに耐えるばかりである。「山猫」が村人をいじめて威張りちらすことができ、その反対に村人が「山猫」の暴力のひたすら耐えるしかない、こうした奇妙な支配と屈従の時代的な根拠が殆ど説明されていない。その結果、「山猫」の「流浪」は彼個人の履歴として、また彼の悪行は個人的な性格欠陥として片づけられてしまう。このような奇妙な支配と屈従は中国人地主と朝鮮小作農との間にも起こっている。年貢を納めに行った宋老人が中国人の地主に殴り殺されるが、朝鮮人小作農達は抗議することさえできない。土地小作権の問題は満州移民史を理解するなにより重要な問題であるにも関わらず、作品の中では物語展開のための補助的な役割で終わっている。このような「赤い山」の問題点は、同じく在満朝鮮人の内部の葛藤を描いた安壽吉の「圓覚村」と比べてみるとより明確に認識できる。そこにも「赤い山」の「山猫」同様の韓翼相という人物が登場しているからである。

「圓覚村」の韓翼相という人物は、「現れさえすれば、必ずなにかをしでかす」村の「癌腫」のような存在である。それで、村人は「彼を虫けらのように思っているが、彼に睨まれては一日も休めなく、それでしかたなく、騙されるのを知りながらも、ついついお金を出さざるをえない」立場に置かれている。「圓覚村」では、韓翼相と村人とのこのような奇妙な関係が時代的な現実とうまく結合している。祖父の代から満州に暮らし、その土地の女性と結婚し、中国国籍を持っている韓翼相は満州の事情に明るく、また言葉も流暢である。村人に数限りの悪行を働くことができるのも、彼のこのような履歴があるからである。それを歴史的に裏付けるのが、北京政府から東三省の各省長と道尹、各県知事に伝達された「在満韓人逐逐秘密指令」であろう。それによると、「借主は中国人商舗、または地方に居住し、帰化して三年以上を経過した朝鮮人をもって保証人とし、中国人の地主が秘密裏に土地を朝鮮人に貸出したり、売却した場合は、国土盗売罪として処罰し、土地貸貸後の監視と責任を負わせる」という部分があるが、これが韓翼相という人物の権力の根拠となっている。実際に韓翼相は圓覚村人の土地購入の際、中国国籍を持たない彼らの代わりに買入主になったり、租税決定において決定的な役割をする作量報告者になる。結局、韓翼相の権力というのは、彼が取得した中国国籍に拠るもので、より根源的には、日本の満州進出と中国側の必死的な抵抗という歴史の狭間から由来するものである。つまり、韓翼相の生き方はこのような時代性から根拠し、また圓覚村人の流浪もこのような歴史を土台にしているといえる。「圓覚村」の韓翼相に対す

る以上の考察は、「赤い山」では見逃されている鄭翼鎬を取りまく時代的な現実をもより明確に浮き彫りにしている。たとえば、韓翼相の権力の根源であり、村人の屈従の原因である国籍と土地相租権との関係は、「山猫」と村人との関係だけでなく、中国人地主に対する朝鮮人小作たちの屈従の原因を成しているのである。結局のところ、「赤い山」では在満朝鮮人の帰化問題、土地相租権などの現実的な問題はほとんど捨象され、そのため、万宝山事件、満州事変直後の一九三三年というその発表年代にも関わらず、在満朝鮮人の諸問題が殆ど看過されているのである。つまり、「赤い山」で見られるのは、満州移民史の複雑な問題の根源をひたすら中国人と朝鮮人の対立の関係から認識しようとする金東仁の単線的な視線だけである。

このような単線的な視線は、すでに一九二五年発表された代表作「馬鈴薯」の中からもより明確に窺うことができる。中国人の王書房と朝鮮人の福女の対立によって展開される「馬鈴薯」の中で、中国人王書房は福女を死に至らせる悪らつな加害者として設定されている。加害者としての中国人と被害者としての朝鮮人という「馬鈴薯」での対立構図は、一九三四年発表された「水平線の向こうに」の中でも繰り返されている。そして、このような対立構図は、時代と満州という背景の違いこそあるものの、「赤い山」の中でもそのまま投影されている。とすると、「赤い山」の背景は必ずしも満州でなくとも構わないのである。なぜなら、金東仁にとって重要なのは、満州の歴史的な現実ではなく、中国人と朝鮮人との対立的な構図にこそあったからである。そして、このような観念は万宝山事件直後、中国人虐殺の暴動に走った平壤人の感情と基本的にはあまり変わらないものであったといえる。また、彼自身、「安重根を始め多くの刺客を排出した多血性の平壤人の一人」、つまりねっこの平壤人だったのである。

このように、「赤い山」は金東仁自身の観念によって形成されたもので、満州移民の問題の背後にある日本の満州進出に対する認識などは全く窺うことができない。その結果、「赤い山」は、中国人地主が朝鮮人の小作を一方的に搾取する対立構図のイメージとして典型化された当時の日本帝国の視線とさほど離れたものではない。これについては、「赤い山」が翻訳されている申建訳『朝鮮代表小説集』（教材社、一九四〇年）の考察からその模様の一端を窺うことができる。

四 朝鮮文学の日本的な受容

一九四〇年前後になると、日本文学では朝鮮文学への興味が急増し、朝鮮文学翻訳集の出版や文芸雑誌による朝鮮文学特集号などが頻繁に組まれることになる。²⁴⁾『朝鮮文学選集』三卷(赤塚書房、一九四〇年)、『朝鮮代表小説集』(申建訳、教材社、一九四〇年)、李光洙の『嘉実』(モダン日本社、一九四〇年)などが翻訳出版され、また、『文学案内』(一九三七年二月)、『文芸』(一九四〇年七月)などでは朝鮮文学特集号が生まれ、『改造』では『朝鮮文学通信』という固定紹介欄が設けられたりする。金史良の「光の中に」(『文芸首都』一九三九年一〇月)が芥川賞候補作として選ばれたのもこの時期である。『朝鮮日報』と『東亞日報』の廃刊(一九四〇年八月)、朝鮮語文芸誌『文章』や『人文評論』の廃刊、さらに文学者思想動員と日本語雑誌『国民文学』の創刊(一九四一年一月)などという朝鮮文学の急激な変化から考察してみると、朝鮮文学に対する日本文壇の突発的な関心は、「朝鮮文学特集」を組んだ『文芸』の編集後記からも窺えるように、「文学の世界を越えた強力な事情が根本的に動いて」いたと言える。²⁵⁾その「強力な事情」をこの編集後記は、日中戦争以降、日本全体が、内地と外地との区別なく、より大きい国民的な情調として結ばれていたことからその原因を指摘している。勿論、この後記でいう日本と朝鮮の親密な結語による一体化した情調は、植民地朝鮮の立場からみると、一切の朝鮮的なものを捨てることから得られるものであったことはいうまでもない。一九三七年から始まる日中戦争、一九三八年の志願兵制度、一九四〇年の創氏改名などの一連の事件は、このような社会的な雰囲気をも十分に推測させるものである。

このような時代相から見ると、一九四〇年前後に日本文学で起こった朝鮮文学に対する興味の底流には、「日本の大陸侵略につながるころの朝鮮関心」があったといえる。²⁶⁾つまり、この時期に翻訳された殆どの作品が翻訳側の論理、いわば「その内容面で体制側の意図を十分に満足させるか、もしくははぎりぎりの所でもその論理にとつて、無害であると認定されたものに限られていた」ものであったのである。²⁷⁾金東仁の「赤い山」が翻訳掲載されている『朝鮮小説代表集』もこのような雰囲気の中で出版されたのである。一九四〇年教材社から出版されたこの作品集には、李光洙、金東仁を始め、一三人の朝鮮の代表的な小説家の作品が収録されているが、その作家と作品を具体的に挙げれば次のようである。

金南天「少年行」、李箕永「苗木」、李孝石「豚」、兪鎮午「滄浪亭記」、蔡萬植「童話」、朴泰遠「崔老人伝抄録」、安

懐南「軍鶏」、金東里「野薔薇」、崔明翼「逆説」、金東仁「赤い山」、李光洙「見えざる女」、李箱「翼」、李泰俊「農軍」

このように、作品集には韓国近代文学の大御所と言われる李光洙を始め、プロレタリア文学の代表的な作家である李箕永や金南天、さらにモダンニズム文学を代表する李箱、朴泰遠など、さまざまな作家の作品が網羅されている。しかし、李箱の「翼」を例外にすると、ここで収録されたほとんどの作品がどのような選別基準によつて選ばれたか疑問を抱かざるを得ない。というのは、それぞれの作品がその個別作家のおもな特徴を代表するものとはいえない作品が多いからである。とくに金南天や李箕永の場合は、朝鮮の植民地的な現実批判を主眼とするプロレタリア作家としての特徴からすると、その収録作品は甚だ距離があるものが選ばれている。その一方、金東仁や李泰俊の場合は、彼らの作品傾向から見ると意外なほど時代的な現実を取り上げた作品が選ばれている。収録過程で発生したこのような奇妙な転倒過程を李泰俊の「農軍」から考察してみよう。

一九三七年発表された李泰俊の「農軍」は金東仁の「赤い山」同様、朝鮮人満州移民の問題を扱っている。しかも、この作品はそのまま直接万宝山事件を扱っている。金東仁の「赤い山」の場合は、直接万宝山事件を扱ってはいないが、その発表年代と中国人と朝鮮人による同様の葛藤から、万宝山事件が大きく投影されているように思わせる。つまり、「朝鮮代表小説集」に掲載されたこの二作は、在満朝鮮人の問題と万宝山事件の影響という面から同一系統の作品といえる。しかし、ここで問題なのは、この二作がどのような側面から、前述した条件、つまり「体制側の意図」と関連しているかのことである。

万宝山事件は、事件発生まもなくの一九三一年、伊藤永之介の短編「万宝山」を通じて小説化され、さらに一九四一年には張赫宙の長編「開墾」によつて作品化されている。李泰俊の「農軍」は、発表年度から見ると、この二作の中間地点に位置している。それは、李泰俊の「農軍」がすでに伊藤永之介の「万宝山」のような、事件自体に対する多様な分析作業の土台の上で成り立っていることを意味する。とすれば、満州移民史に対する当代のさまざまな検証資料は、この作品において、一体どのくらい反映されているだろうか。その内容を見てみよう。

主人公俞昌権一家は故郷の土地を全部売り払って、満州の地に夢を抱いて、長春のある朝鮮人部落に落ち着くことにな

る。そこで一家は、村人とともに中国側から払い下げられた土地を水田化するため水路作業に取りかかるが、水田化に対する中国農民の持続的な反対によって、水路作業はさまざまな難関にぶつかる。しかし、朝鮮人村人はその難関を乗り越え、ついに水路を完成するに至る。

このような内容から見ると、作品全体は土地の開墾に対する朝鮮人の強い意志で一貫している。そして、このような意志の設定は、開墾の成功を予想し、それを正当化する論理構造に裏打ちされ、結局のところ、時代的な現実がほとんど看過されている。つまり、開墾に対する朝鮮人の強い意志を強調すればするほど、このような意志を妨害する対立概念の悪役が必要になり、それを中国農民が担うことになるのである。そのため、作品の中に登場する中国農民はいずれも無知で、かつ悪らつな人間として描写されており、中国官憲などは朝鮮人からの賄賂ばかり要求する腐敗した人間として描かれている。つまり、一九三一年、伊藤永之介の「万宝山」ですでに認識された問題、例えば、水路作業を妨害する中国農民の背後としての中国政府、朝鮮人に対する中国政府のしつこい牽制理由などが、この作品では殆ど言及されていないのである。その結果、「農軍」においても、金東仁の「赤い山」同様、在満朝鮮人の現実的な問題の根源として日本帝国の本質が見逃されているといえる。「農軍」がこのように現実を無視してまで開墾の成功だけにこだわったのは、当時の時代的な状況と大きく関わっている。

日本においては満州移民は、一九三二年以降、数次に渡る試験移民を経て、三七年から大量移民の時代に突入している。²⁹一九三二年満州国が建設された後、日本は満州支配の安定と強化のため、軍事治安上の必要に迫られ、その役割の一環として満州移民が国策として定められる。このような時代的な要求に応えるかたちで、「新天地、新世界への憧憬」をテーマにした大陸開拓文学がブームになっていく。大陸開拓に関心を持つ文学者が関係当局と緊密な提携のもとで、「国家的事業達成の一助に参与し、文章報国の実を挙げる」ため、一九三九年には「大陸開拓文芸懇話会」が設立される。つまり、満州移民の国策化とその奨励のため、開拓文学が要求されはじめたのが、一九三七年頃からであり、ちょうどこの年に李泰俊の「農軍」が発表されているのである。このような時代上の一致は、「農軍」が日本の満州大陸進出の一環として成立された開拓文学の一種であったことを指し示しているように思われる。金東仁の「赤い山」が加害者としての中国のイメージを極度に誇張することによって、日帝の満州進出正当化に一助したとすれば、李泰俊の「農軍」は開拓の幻影を造り上げることによって、少なからず大陸進出に寄与しているといえる。この二作が一九四〇年の申建沢『朝鮮代表小説集』

に掲載された背景にはこのようは理由が大きく働いていたといえる。

五 結論

以上、見てきたように、「赤い山」は日帝下の満州移民史と密接に関係している。しかし、この作品には、当時の多くの韓国リアリズム小説が持つ時代への認識と変革の意志などは見あたらない。それよりも、当代の現実を歪曲・隠ぺいすることによって、日帝側の意図に添っているように思われる。その点、逆に、この作品を通して体制側の意図を読みとることも可能である。

「赤い山」の発表された一九三三年というのは、日本の満州侵略の意図が現実化された万宝山事件と満州事変が起こった直後である。このような時期に、金東仁は当時の敏感な政治的な懸案になっている満州と在満朝鮮人の問題を取り上げている。耽美の世界に閉じ込もっていた今までの彼の文学世界からすれば、このような素材の選択は、非常に突飛的なものであったといえる。しかし、このような素材の急変にも関わらず、「赤い山」の中では、依然として耽美的な作品でみせた以前の非現実性や観念性はそのまま露出している。つまり、植民地現実の一つの核心とすべき満州移民史問題を、金東仁は中国人と朝鮮人の対立という彼自身の観念を通じて認識しているのである。このような金東仁の視線は、一九四二年発表された安壽吉の「圓覚村」との比較から一層きわだつ。「圓覚村」の場合は、在満朝鮮人と中国人の対立の根源として日本の満州進出を指摘しているが、金東仁の「赤い山」においては、加害者の中国と被害者の朝鮮という観念的な対立構図として認識されているのである。そのため、この作品は、在満朝鮮人問題の背後勢力としての日帝の存在が看過されているだけでなく、日本の満州侵略を正当化しかねないところさえあるのである。一九四〇年、「赤い山」が『朝鮮代表小説集』に翻訳紹介されたのも、この作品が持つこのような親体制的な性格を証明しているかのように思われる。

注

(1) 金東仁小説においての、歴史意識の欠如と芸術至上的な傾向を指摘、批判する主な論文には、次のようなものがある。
金允植「反歴史主義志向の過誤」(『文学思想』、一九七二年一月号)

- 金春美『金東仁研究』（高麗大学校民族文化研究所、一九八五年）
- 李康彦『金東仁とリアリズム文学の限界』（嶺南語文学、一九七五年二月）
- 長璋吉『朝鮮言語文学』（河出書房新社、一九八九年）
- (2) 韓国教育開発院編『中学校国語教師用指導書2-1』（大韓教科書株式会社、一九八四年）
- (3) 注(2)に同じ。
- (4) 『国史大事典』（国史大事典編集委員会、吉川弘文館、一九九二年）
- (5) 朴永錫『万宝山事件研究』（亜細亞文化社、一九七八年、ソウル）
- (6) 張赫宙『追はれる人々』（改造、一九三二年一〇月）
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 本文中の万宝山事件の経過に対する記述は、おもに朝日新聞一九三二年七月三日から七月八日までの記事を参考にした。
- (9) 中西伊之助『満州に漂泊する朝鮮人』（改造、一九三二年八月）
- (10) 注(5)の朴永錫『万宝山事件研究』によると、一九世紀初めまでは鎮国政策のよって間島開墾が厳格に統制されたが、一八八三年西北経略使魚允中の建議（越江罪人不可尽殺）により、処罰を中止し、地券を発売して法定主民になるようにしたという。その後、中国政府は間島地域に限らず、自国の利益のため、未開墾地開墾と稲作に長けている朝鮮人を優先的に受け入れる。また、清の吉林省では越江流民に中国の籍を与えたという。
- (11) 注(9)に同じ。
- (12) 注(9)に同じ。
- (13) 『朝鮮日報』一九三二年七月九日付記事。
- (14) この会見は、吉林省駐在朝鮮人に対する中国人の迫害を謝罪する形式ではあるものの、中国側は在満朝鮮人の国籍に関する問題をおもに取り上げている。要するに、中国側は朝鮮人の満州移住を日本の満州侵略の先兵と見なし、この問題の解決は朝鮮人の中国国籍取得にあると言及している。（『東亜日報』一九三二年一月二十九日付参照）
- (15) 伊藤永之介『万宝山』（改造、一九三二年一〇月号）
- (16) 注(15)に同じ。
- (17) 「赤い山」の発表年代は、現在刊行されている『三千里』影印本では一九三三年四月になっているが、すべての論著の中では一九三三年四月として通用されている。この問題については、一つの疑問として提示していかうと思うが、取りあえず本稿では一般的な慣例に従った。
- (18) 中西伊之助『惨たり！在満朝鮮同胞』（改造、一九三二年二月）注(18)と同じ。
- (20) 本稿においての「赤い山」からの本文引用は、申建訳『朝鮮代表小説集』（教材社、一九四〇年）に依った。

- (21) 安齋吉「圓覚村」〔国民文学〕、一九四二年二月号)
- (22) 『東亜日報』一九二七年二月三日付。
- (23) 注(9)に同じ。
- (24) これらの問題については、林春日『増補近代日本文学における朝鮮像』(未来社、一九八五年)、梶井陟『現代朝鮮文学への日本人の対応(2)』(『富山大学人文学部紀要』六号、一九八二年)に詳しい。
- (25) 編集後記「文芸」(一九四〇年八月)
- (26) 田中明「朝鮮文学への日本人のかかわり方」(『文学』、一九七〇年一月)
- (27) 梶井陟「現代朝鮮文学への日本人の対応(2)」(『富山大学人文学部 紀要』六号、一九八二年)
- (28) 参考的に朝鮮文学が初めて日本語翻訳されたのは、一九二五年九月『文章倶楽部』に翻訳された玄鎮建「火事」である。以降、一九二七年一〇月号には、金東仁の「馬鈴薯」が同雑誌に翻訳紹介されたという。注(27)参照。
- (29) 日本での満州移民は、一九三七年から二十年間、百万戸送出」というスローガンで五百万人の送出を計画した。この計画においては、移民の規模、形態などのよって、農業集団移民と自由移民と分けられ、おもに前者の移民に主眼点を置いた。農業集団移民は徴兵検査後の成人男子を募集対象にしており、この移民に対する統治者の期待と重要性を窺わせる。白取道博「満蒙開拓青少年義勇軍関係資料1」(『不二出版者』一九九三年)参照。
- (30) 尾崎秀樹『近代文学の傷痕―旧植民地文学論』(岩波書店同時代ライブラリー、一九九一年)

付記：稿を成すに際して、終始、名波弘彰先生のご指導を賜った。心からお礼を申し上げたい。